

# 令和6年度 秋田県埋蔵文化財 発掘調査報告会



2025 **3.8**<sub>[土]</sub> 10:30-15:10

会場／大仙市仙北ふれあい文化センター

主催／秋田県埋蔵文化財センター

共催／大仙市

協力／秋田市立秋田城跡歴史資料館 雄勝城・駅家研究会 美郷町教育委員会 由理柵・駅家研究会 横手市教育委員会 (50音順)

# 目次

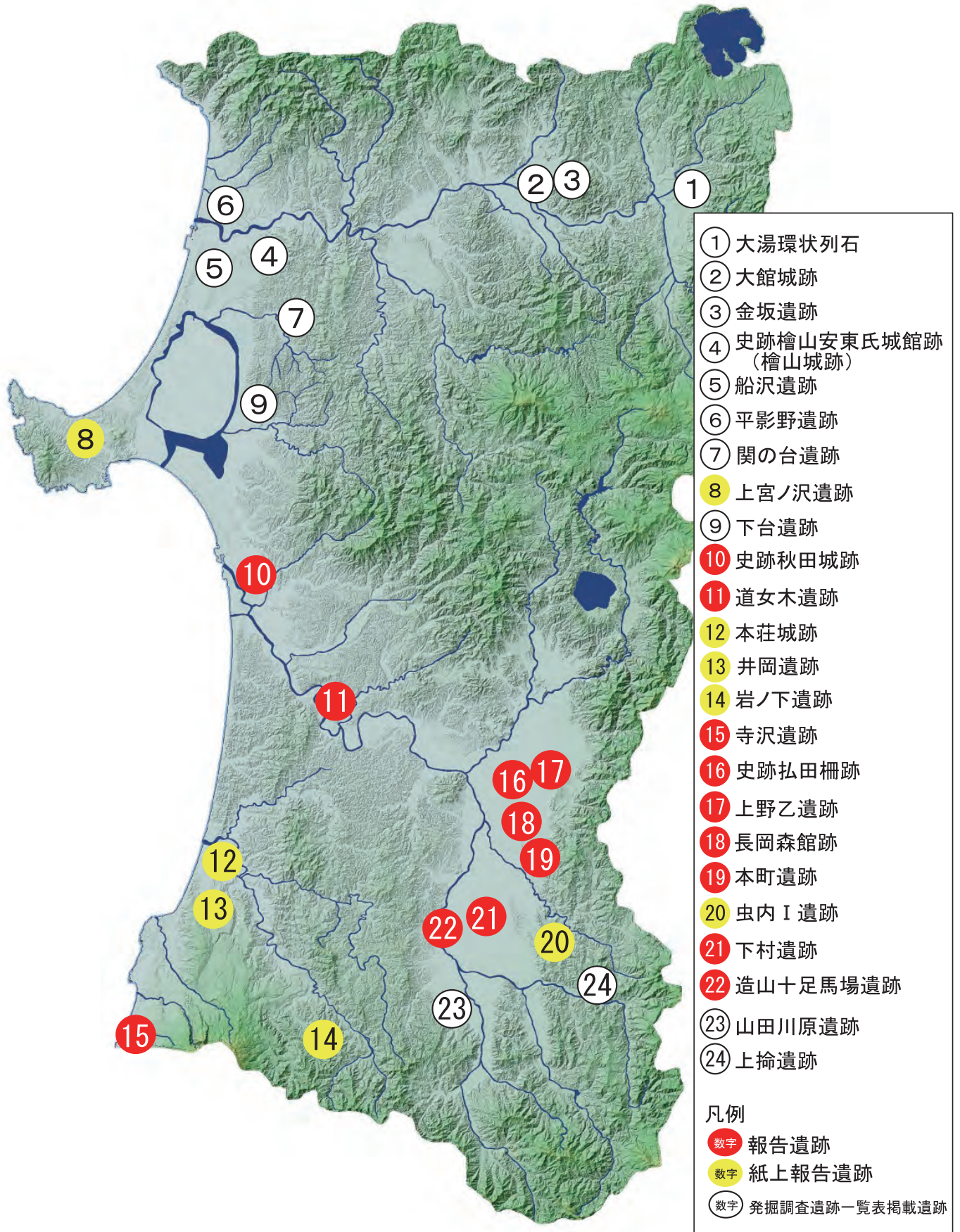
令和6年度県内発掘調査遺跡一覧表… 表紙裏  
 令和6年度県内発掘調査遺跡位置図…………… 1  
 道女木遺跡…………… 2  
 上野乙遺跡…………… 4  
 史跡秋田城跡…………… 6  
 造山十足馬場遺跡…………… 8  
 史跡払田柵跡…………… 10  
 寺沢遺跡…………… 12  
 下村遺跡…………… 14  
 長岡森館跡…………… 16

本町遺跡…………… 18  
 紙上報告  
 上宮ノ沢遺跡…………… 20  
 虫内I遺跡…………… 21  
 井岡遺跡…………… 22  
 岩ノ下遺跡…………… 23  
 本荘城跡…………… 24  
 年表…………… 25

## 令和6年度県内発掘調査遺跡一覧表

No.	遺跡名	所在地	調査主体	調査面積 (㎡)	主な時代： 遺跡の性格	No.	遺跡名	所在地	調査主体	調査面積 (㎡)	主な時代： 遺跡の性格
1	大湯環状列石	鹿角市十和田大湯	鹿角市教育委員会	31	縄文：祭祀遺跡	12	本荘城跡	由利本荘市尾崎	秋田県教育委員会	150	近世：城館跡
2	大館城跡	大館市字三ノ丸	大館市教育委員会	296	中世：城館跡	13	井岡遺跡(第6次)	由利本荘市西目町西目	由利柵・駅家研究会	60	奈良・平安：集落跡
3	金坂遺跡	大館市字八幡	大館市教育委員会	40	中世・近世：集落跡・屋敷跡	14	岩ノ下遺跡	由利本荘市島海町百宅	秋田県教育委員会	3,700	中近世：集落跡
4	史跡檜山安東氏城館跡(檜山城跡)	能代市檜山	能代市教育委員会	103	中世：城館跡	15	寺沢遺跡	にかほ市象潟町小砂川	秋田県教育委員会	1,300	縄文：集落跡 平安：集落跡
5	船沢遺跡	能代市浅内	能代市教育委員会	2,050	平安：集落跡	16	史跡払田柵跡(第158次)	大仙市払田・美郷町本堂城回	秋田県教育委員会	144	平安：城柵官衙跡
6	平影野遺跡	能代市向能代	能代市教育委員会	497	平安：集落跡	17	上野乙遺跡	美郷町土崎	秋田県教育委員会	690	縄文：墓域
7	関の台遺跡	三種町森岳	三種町教育委員会	763	縄文・平安：遺物包含地	18	長岡森館跡	美郷町金沢	美郷町教育委員会	114	縄文：遺物包含地 平安：不明
8	上宮ノ沢遺跡	男鹿市男鹿中山町	秋田県教育委員会	720	縄文：集落跡	19	本町遺跡	横手市本町	秋田県教育委員会	1,292	中世：集落跡 近世：城下町
9	下台遺跡	八郎潟町小池	八郎潟町教育委員会	60	縄文：集落跡	20	虫内I遺跡	横手市山内土淵	秋田県教育委員会	235	縄文：墓域
10	史跡秋田城跡(第118次)	秋田市寺内	秋田城跡歴史資料館	26	近世：城柵官衙遺跡	21	下村遺跡	横手市平鹿町下吉田	横手市教育委員会	2,560	平安・中世・近世：集落跡
	史跡秋田城跡(第119次)	秋田市寺内	秋田城跡歴史資料館	66	奈良・平安・近世：城柵官衙遺跡	22	造山十足馬場遺跡(第9次)	横手市雄物川町造山	雄勝城・駅家研究会	484	奈良：集落跡
	史跡秋田城跡(第120次)	秋田市將軍野南	秋田城跡歴史資料館	161	奈良・平安・近世：城柵官衙遺跡	23	山田川原遺跡	湯沢市山田	湯沢市教育委員会	71.47	縄文：集落跡
11	道女木遺跡	秋田市雄和種沢	秋田県教育委員会	2,400	縄文：集落跡	24	上捨遺跡	東成瀬村田子内	東成瀬村教育委員会	100	縄文：集落跡

(太字は報告遺跡、資料掲載遺跡。番号は右頁の位置図に対応します。)



令和6年度県内発掘調査遺跡位置図

どうめきいせき  
道女木遺跡

ゆうわたねざわあざどうめき  
秋田市雄和種沢字道女木

道女木遺跡は、秋田空港の南南西3.5km、日本海に注ぐ雄物川の河口から南東17.1kmの地点に位置します。県南部から北西に流れる雄物川は、遺跡の下流側で大きく蛇行しますが、遺跡はその右岸に形成された標高11～14mの自然堤防上に立地しています (①)。

雄物川の河川事業に伴う5,100㎡が調査対象で、今年度は下流側の2,400㎡を調査しました。調査の結果、縄文時代と中世の複合遺跡であることが分かりました。

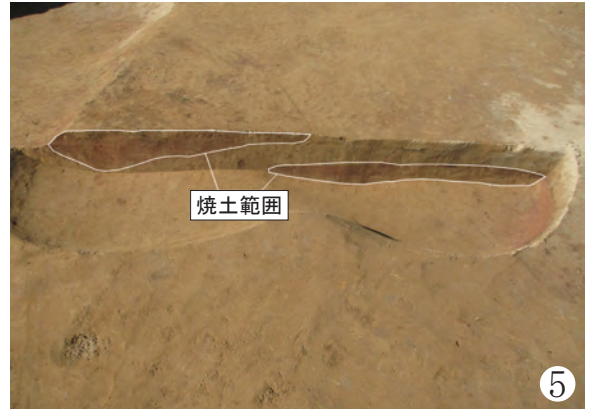
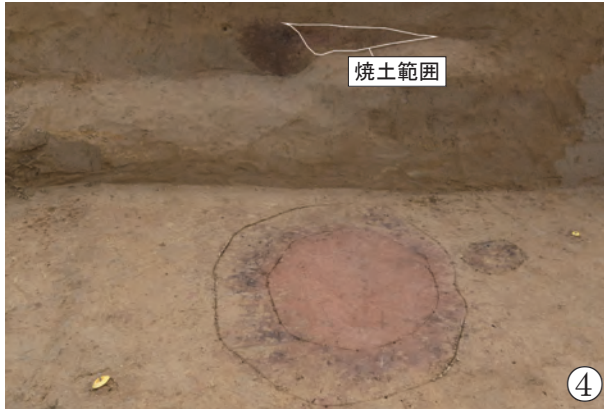
表土の下20cm程で検出された中世(約700～400年前)の遺構には、カマド状遺構 (②)、井戸跡、柱穴があります。カマド状遺構は、焚口から煙道まで全体が良く残るものや、燃焼部の底部しか残らないものなど7基ありました。今年の調査範囲の中央に5基、南側に2基の2か所にまとまることから、中世の場の使用方を反映したものと考えます。

中世の遺構が見つかった地面と同じ深さの地面で、縄文時代の陥し穴状遺構も見つかりました。長さ2.8m、幅0.3mの細長い溝状のもの (③) と径1m程の円形のものがあります。周辺で中期の土器(約4,500年前の円筒上層式)が出土していることから、陥し穴状遺構はその時期のものと考えています。

縄文時代中期と中世の遺構を同じ



地面で検出したことで、縄文時代中期にはほぼ現在の地形になっていたことが分かりました。さらに、今回の調査では、その下に分厚く堆積した土層中から、焼土遺構101基、配石遺構11基などを検出したことも大きな成果です。焼土遺構とは、火を焚いたために周りの地面が赤く変色した痕跡です。中でも注目されるのは、一つの焼土遺構の下に、褐色の土層を挟んで、別の焼土遺構が検出され



た例が複数あったことです。焼土遺構の間の褐色の土層は厚いもので60cm程 (④)、薄いもので10cm程 (⑤) です。これは、ある時期の活動で焼土ができ、その後の河川氾濫の時期に人々が遺跡から離れ、離水すると再びこの地で活動したことを示しています。焼土遺構が検出される地面は、少なくとも6面あることを確認しました。最下層の焼土は、現在の地表面から4m程も下になります。

また、配石遺構には30cmを超える<sup>あかくれき</sup> 垂角礫3個を山のように組み合わせたものや<sup>いしざら</sup> 石皿・<sup>れき</sup> 自然礫・<sup>すり</sup> 磨石などを並べたもの、あるいは15cm程の大きな<sup>せきすい</sup> 石錘を径1m程の範囲に72個もまとめて置いたもの (⑥) があります。石錘は、<sup>ぎよろう</sup> 漁撈用の網のおもりに使われたと考えられ、ほかにも1か所に2点、あるいは7点まとまった所もありましたが、このような石錘の出土事例については類例を集めて比較検討したいと考えています。



縄文時代中期以降の安定した地面より下の分厚い堆積層から出土した土器には、表面に矢羽根状の縄文が施された前期前葉 (約6,500年前) のものや、器の内外面に縄文が施され (⑦)、底部が丸底になる早期後葉 (約7,000年前) のものがあります。この時期は、早期後半から進む温暖化により、前期前葉には現在よりも平均気温が2℃程高くなる時期にあたります。雄物川沿いの遺跡周辺も、この温暖化の中で、繰り返し大規模な河川氾濫があったと考えられます。今後、検出遺構や出土遺物の検討を進め、縄文時代の人々の活動実態にせまりたいと考えています。



うわ の おつ い せき  
上野乙遺跡

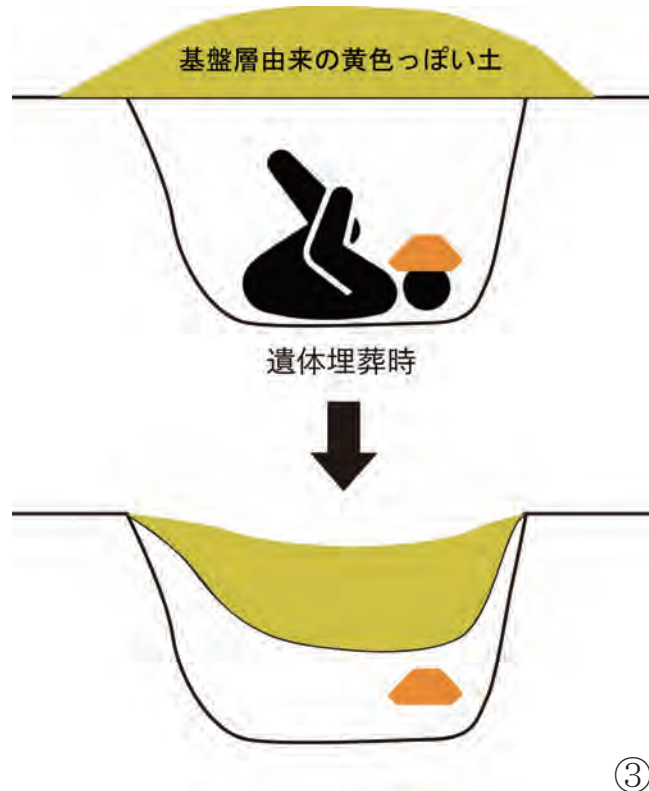
つちざき あざうわ の おつ  
仙北郡美郷町土崎字上野乙

上野乙遺跡は、払田柵跡から東へ3kmに位置し、六郷扇状地の扇央部、標高64mに立地します。遺跡の北西1kmの扇端部には湧水があり、その周辺に中屋敷Ⅱ遺跡等の縄文時代の集落跡が位置しています。県道11号角館六郷線の拡幅工事に伴い、発掘調査が行われることになりました(①)。

調査の結果、土坑9基、フラスコ状土坑13基、性格不明遺構1基が検出されました。

遺構のほとんどは調査区の中央に集中しており、底面から土器が逆さまの状態出土した土坑が1基ありました(②)。お墓と考えられ、長野県の北村遺跡や千葉県ありよしなみの有吉南貝塚等の事例と同じように、土器を遺体の頭に被せて葬っていたと推測されます。鎌倉時代から江戸時代にかけて、伝染病などで亡くなった人の頭に鉄鍋やすりばち播鉢などを被せて埋葬する事例があります。縄文時代においても似たようなことがされていたのかもしれませんが。

また、土坑に堆積した土からもお墓であったと推測することができます。土坑の中に、基盤層由来の黄色っぽい土が厚く堆積していることが分かります(②)。この土は元々土坑の上にマウンドのように盛られて、まわりの地面より高くなっていたと思われ、遺体の肉体部が土壌で分解して失われた後で、落ち込んだと考えられます(③)。青森県そとめやち五月女菴遺跡では、縄文時代晩期に盛られた土が、現在に至るまで高まりのまま残った状態の土坑を多数確認しており、人骨も出土しています。



入り口が狭く、底面が広いフラスコ状土坑もお墓であった可能性があります(④・⑤)。本来は、食糧貯蔵穴しょくりょうちよぞうけつとして使われたと考えられますが、お墓に転用された事例も少なくありません。完全な形のままの土器が出土しており、副葬品の可能性があります。

この他にも多くの土坑、フラスコ状土坑が検出されました(⑥)。遺物は、非常に少なく、小さい土器片が数点出土しただけでした。これらの底面には、有機物が土壌化したと考えられる黒色土が堆積していました。この黒色土が遺体なのか食糧なのかは、採取した土を分析し、今後検討していきます。

一つ一つの遺構は、密集して分布しているにもかかわらず、各々重ならないことから、出土した土器の年代である縄文時代晩期末葉から弥生時代前期初頭の頃に、同時に存在していたと考えられます。この時期のフラスコ状土坑は、県内で類例が非常に少なく、当時の埋葬もしくは食糧貯蔵について考える上で、重要な資料になると思われます。

また、調査区北側では、直径約4mの性格不明遺構が検出されました(⑦)。底面は、礫層で、凹凸が激しいことから、土器を作るための粘土を採掘した跡ではないかと考えています。

このように、多数の土坑やフラスコ状土坑が検出された一方、たてあな堅穴建物跡などの居住施設が見つからなかったことから、上野乙遺跡ほいさは墓域もしくは食糧の貯蔵域であったと考えられます。今後、周辺の遺跡も合わせ、縄文時代晩期から弥生時代前期にかけての、この地域の様子を明らかにしていきたいと思ひます。



## 史跡秋田城跡 (第119・120次調査)

## 秋田市寺内大畑、将軍野南

史跡秋田城跡は、秋田市西部の寺内地区を中心とした標高40～50mの通称高清水丘陵上に位置する奈良・平安時代の古代城柵の遺跡です。昭和14年に国の史跡に指定され、国による調査を経たのち、昭和47年から秋田市による保存管理のための調査が継続して行われています。令和6年度は、史跡秋田城跡中央部の大畑地区北側において第119次調査と、北東部の将軍野南地区において第120次調査を実施しました (①)。

第119次調査は、5月末から8月前半にかけて実施しました。調査地は、高清水丘陵北端の標高約48mの地点に位置しており、北側に急峻な斜面があり、周辺には、近世の北前船の目印となったとされる五輪塔や明治天皇・大正天皇の御休憩所碑が存在します。これまでの調査で、調査区西側の焼山地区において、第92次調査A区(平成20年度)・第102次調査(平成25年度)で外郭西門とそれに取り付く築地塀跡等の外郭区画施設が検出されています。また、調査区東側の護国神社北側でも、築地塀跡が一部確認されています。しかし、外郭線北辺については不明な点が多いため、外郭北辺西側部分の把握を目的として、第119次調査を行いました。

調査の結果、調査区北西部で築地塀跡が検出されました。調査区全体には、砂が厚く堆積しており、特に、8世紀末～10世紀に5回にわたる砂の堆積が確認されました。築地塀跡の他に、江戸時代以降の遺構である溝跡2条と、古代の遺構である竪穴建物跡7棟、溝跡2条、土坑4基、ピット4基、性格不明遺構2基が検出されました。

築地塀跡は、北東―南西方向に延びており、積み土は幅2.2m確認され、犬走り部分を含めると幅3.6mを測ります。犬走り部分からは、寄柱と考えられるピットも検出されました。積み土は、橙色粘土・灰白色粘土・黒色粘土を使用しています (②・③)。これまでの調査成果を基にすると、この築地塀は奈良時代に構築されたと考えられます。平安時代の区画施設として柱列塀や材木列塀が構築される例がありますが、第119次調査地では検出されませんでした。また、築地塀跡周辺からは、築地塀に葺かれていたと考えられる大量の瓦や、築地塀を崩した土で整地した層が発見されました。

竪穴建物跡は、出土した土器の年代や築地塀跡との重複関係から、8世紀末～9世紀前半の期間に造られていたことが分かりました (④)。この時期は砂が繰り返し堆積していますが、竪穴建物を同じ場所に造り続けている状況が確認されました。鉄滓や鉄鏃、鉄釘が出土した棟が多くあり、フイゴ羽口や大刀の柄頭、刀子、紡錘車が出土した棟もあります。

以上のように、築地塀跡が検出されたことで、外郭北辺西側の外郭線を把握することができ、外郭線が丘陵の地形に合わせた位置に存在することが分かりました。

第120次調査は、8月後半から9月にかけて実施しました。調査地は、高清水丘陵の北側に位置する旧



秋田県自治研修所の跡地です。この場所は、北東方向に延びる尾根が存在する地形が外郭西門跡の立地と類似していることから、外郭北門跡の有力な候補地となっています。これまでの調査で、築地塀跡や材木塀跡、櫓状建物跡等が検出されたことで、外郭北辺の区画施設が確認されていますが、後世の削平や攪乱等による土地の改変が多くあり、外郭北門跡は確認できていません。こうした状況から、第120次調査は、外郭北門跡の位置を推定するために、門を通る城内北大路の確認を目的に実施しました。

調査の結果、古代の道路遺構の可能性のあるSX01を確認しました。また、調査区北東端で築地塀跡と、北西部で古代と近世の土取り穴跡を検出しました(⑤)。

SX01は、道路造成に関係すると考えられる第IV-1・2層で構成されます。第IV-1層は、第IV-2層が分布する範囲の両端部で確認されました。第IV-2層は、調査区北東側に存在する北東-南西方向に延びる尾根上で確認されました。第IV-2層が確認された幅は7.0mですが、第IV-1層を基準にすると、推定幅は10.5～10.8mです。SX01は、出土遺物がなく、道路側溝や硬化面も検出されていないため、道路遺構と断定はできませんが、第IV-1・2層の堆積状況および土質や位置などからみて、古代の城内北大路に関係する可能性が高いと考えました。

以上のように、北東-南西方向に延びる城内北大路に関係すると考えられるSX01が確認されたことから、調査地の北東方向に外郭北門が存在する可能性が推測できます。しかし、今回の調査では、道路側溝や硬化面は確認されなかったため、今後、このSX01が城内北大路であるのかを精査しつつ、外郭北門跡の確認を目的とした調査を行う予定です。

(秋田市立秋田城跡歴史資料館)

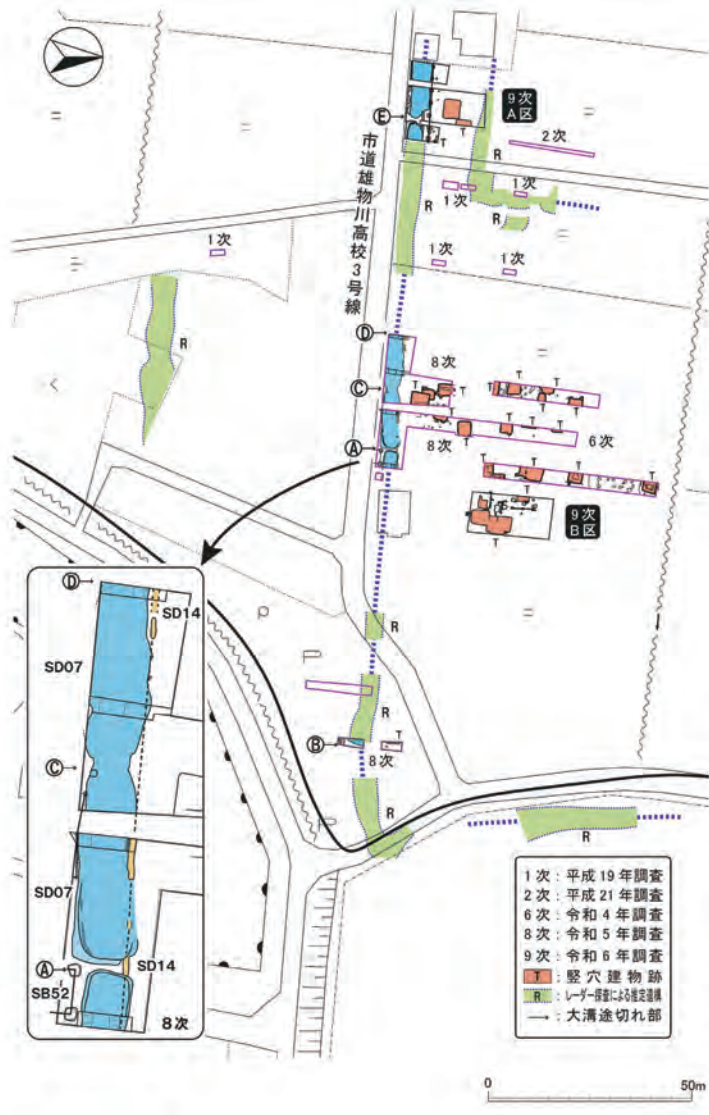


つくりやま と あし ば ば い せき  
**造山十足馬場遺跡 (第9次調査)** 横手市雄物川町造山字十足馬場

造山十足馬場遺跡は、JR奥羽本線横手駅の西南西11km、横手市雄物川町造山にある標高50mの砂礫段丘上に立地します。本遺跡の調査主体は、平成31年発足の民間団体である雄勝城・駅家研究会です。研究会は、奈良時代の天平宝字3（759）年に造営されたと史料が残る雄勝城や雄勝駅家、そして寺院等の関連する遺跡の所在地特定や各遺跡が担ったであろう役割を解明するため、地元の協力団体、発掘ボランティアの方々からの支援と協力を得て活動を行っています。

研究会が推定する雄勝城等の所在地は造山地区とし、令和元年から同地区内で継続的に発掘調査を実施しています。令和2・3年には十足馬場西遺跡から「驛長」「厨」の墨書土器が出土、令和4・5年には十足馬場南遺跡から城柵の区画施設にも認められる大溝跡や材木塀跡が検出されました。令和6年に入り、十足馬場地内に点在する遺跡範囲の見直しが行われ、上記2遺跡等が統合され新たに造山十足馬場遺跡として登録されました。同遺跡内での発掘調査回数を積み上げると計8回です。今回の調査は令和4・5年に引き続き旧十足馬場南遺跡内を対象としましたので第9次となります。調査地区は西側の9次A区と東側の9次B区の2か所です(①)。

研究会が推定する雄勝城等の所在地は造山地区とし、令和元年から同地区内で継続的に発掘調査を実施しています。令和2・3年には十足馬場西遺跡から「驛長」「厨」の墨書土器が出土、令和4・5年には十足馬場南遺跡から城柵の区画施設にも認められる大溝跡や材木塀跡が検出されました。令和6年に入り、十足馬場地内に点在する遺跡範囲の見直しが行われ、上記2遺跡等が統合され新たに造山十足馬場遺跡として登録されました。同遺跡内での発掘調査回数を積み上げると計8回です。今回の調査は令和4・5年に引き続き旧十足馬場南遺跡内を対象としましたので第9次となります。調査地区は西側の9次A区と東側の9次B区の2か所です(①)。



かりました。改めて昨年検出の大溝跡平面図を確認すると(①左下)、大溝の幅が狭くなっている箇所がもう2点(①→C・D)ありました。A-C間とC-D間の距離はいずれも15mです。また、東端の途切れ部Bと西端途切れ部Eまでの距離は155mであること、事前に実施した地中レーダー探査により、D-E間にも複数の途切れ部反応があることから推測すれば、検出された大溝とは、長さ約15mを一単位とする溝が東西方向に連結する形状となるようです。

同じ形状の遺構は、武蔵国衙跡(東京都府中市)にあることが分かりました。武蔵国は現在の埼玉県・東京都・神奈川県東部の地域であり、国衙は国の役所を示します。15m一単位で連結する溝は、国衙域(南北約289m、東西約200mの長方形)の外郭をなす土塁あるいは築地を構築するための土取り穴であるとの報告があります。とすれば、造山の大溝も空堀のような機能が主ではなく、土塁・築地構築のための土取り穴であった可能性が出てきました。現在の市道雄物川高校3号線下に土塁あるいは築地といった盛土施設が存在していたと想定します(②)。

また、大溝に先行する区画施設である材木堀跡SD14も確認できました(②)。SD14は昨年調査でも検出されており(①左下)、東西方向100m以上にわたり延びているようです。

今回のA区調査では、新たな遺構も検出できました。一本柱列堀跡SA68です(②)。一辺0.9~1.1m程の隅丸方形の柱掘方7基が3m(10尺)間隔で東西に並びます。うち1基から柱痕跡が認められ径20cm程の円形です。一本柱列堀とは柱を等間隔で建ててその間に板材などを渡して堀とするものを想定しています。SA68は西にも東にも延びる可能性があります。東側の昨年調査区では未検出です(①左下参照)。その南側には大溝跡SD07が位置することから、SA68は両年の調査区間で北側に屈曲するのかもしれませんが。



一方、大溝跡の北側となる9次B区では、<sup>たてあなたても</sup>堅穴建物跡6棟等が検出されました(③)。堅穴にはカマドが設置されますが、煮炊きを行う燃焼部で生じた煙を長い煙道を経て屋外に排出するタイプ(④、S I 64)と燃焼部奥からすぐ屋外に排出するタイプ(⑤、S I 63)の2種類が認められます。前者は在地の住居に後者は関東系の住居に多く採用されます。



大溝跡SD07の形状、関東系のカマドをもつ堅穴の存在、出土遺物に少量ではあるものの、昨年引き続き関東系の土師器が混在することを前提とすれば、各種の区画施設である材木堀、一本柱列堀、土塁・築地の構築にあたり、武蔵国を含む関東系の集団の介在

がより濃厚になったと考えます。

最後に、本遺跡調査にあたり青山学院大学文学部史学科考古学実習コースの学生・教員の協力を得たことを明記しておきます。

(雄勝城・駅家研究会)

# 史跡<sup>し せき</sup> 弘田<sup>ほつ た</sup> 柵<sup>さく</sup> 跡<sup>あと</sup> (第158次調査) 大仙市<sup>ほつ た</sup> 弘田<sup>ほつ た</sup>・仙北郡<sup>ほん とう</sup> 美郷町<sup>し ろ ま わ り</sup> 本堂城<sup>ほん とう</sup> 回<sup>ま わ り</sup>

史跡弘田柵跡は、古代律令国家が対蝦夷政策の拠点として設置した城柵の一つです。平安時代の9世紀初め(802年)に創建され、10世紀後半までの約200年間存続していました。長森と真山の二つの丘陵を大きく取り囲む「外柵」、長森だけを囲む「外郭線」、板塀で方形に区画された「政庁」の三重の囲



いから構成されます。総面積は約90万㎡あり、東北地方の城柵の中でも最大級になります。

弘田柵跡の周辺では、明治年間から角材が出土することが知られていました。昭和5(1930)年に最初の発掘調査が行われ、翌年、秋田県初の国史跡となりました。昭和49(1974)年には、弘田柵跡調査事務所が設立され、以後秋田県が継続的に発掘調査を行っています。



第11次5年計画(令和6~10年度)の初年度にあたる第158次調査は、外柵南門と外郭南門を結ぶ南大路の東側隣接地を調査しました(①・②)。この地区の遺構・遺物の分布状況および変遷を把握し、この場所がどのような機能を持っていたのか解明することが目的です。

調査の結果、盛土整地地業1か所、外柵材木塀跡1条、大型祭祀土坑3基、土坑1基、遺物集中部1か所、炭化物集中部2か所、性格不明遺構1基、抜根跡3基、足跡状遺構2か所、柱穴様ピット13基が確認され、9世紀中頃を中心とする遺物が出土しました。



中でも特筆すべきは、盛土整地地業の存在です(③)。整地層は、4~22cmの厚さで広範囲に残っていました。整地層がヒビ割れた部分からは、火山灰がブロック状に検出されており、整地層より上層には火山灰が堆積していたと考えられます。この火山灰層は後世の水田耕作によって削られたと見られます。火山灰は、西暦915年に噴火した十和田火山のものと考えられます。整地層からは、須恵器や土師器の小片(④)をはじめ、瓦、鉄滓や羽口、砥石、被熱礫など様々な遺物が出土しました。整地層直下の大型祭祀土坑や遺物集中部で出土した遺物が9世紀中頃であること、整地層中で検出された



土坑から出土した遺物が9世紀末～10世紀初頭であることから、盛土整地が行われたのは9世紀後半と考えられます。また、整地層直下からは、抜根跡が検出されました。盛土整地を行うにあたって広範囲で抜根を行ったと考えられます。今回の調査範囲からは整地後に建てられた建物跡等の遺構が見つかっておらず、現段階では整地を行った目的は不明です。

復元された外柵南門の東側では、整地層は既に削平されていましたが、材木堀跡が検出されました(⑤)。昭和5年に発掘調査されていたため、遺構内の土層堆積状況や整地層との新旧関係を確認することはできませんでした。一方で、柵木は良好な保存状態が維持されていました。また、外柵と外柵南門は沖積地の中でも標高が高い場所を選んで建てられたことが判明しました。

大型祭祀土坑(⑥)は、長軸が2～3mとなる大型の土坑です。9世紀中頃の墨書須恵器(⑦・⑧)や意図的に打ち欠かれた土師器坏、遺構を覆うように折り重なった須恵器甕片のほか、木製品や木片が多数出土し、土坑を埋め戻す際に祭祀的な行為が行われたと推測されます。外柵南門の周辺では、第7次調査で嘉祥2(849)年と書かれた木簡が出土した土坑をはじめ、長軸が2mを超える大型土坑が多数確認されていることから、9世紀中頃に外柵南門周辺に大型祭祀土坑群が構築されたと考えられます。

今回の調査では、払田柵跡創建期にあたる9世紀前半の遺構・遺物は外柵材木堀以外には確認されず、南大路の東側は積極的な土地利用はされていなかったと考えています。9世紀中頃になると、外柵南門の周辺に大型祭祀土坑が構築されます。これまで9世紀中頃に外柵材木堀が失われた後は、城柵としての範囲が外郭線まで縮小するとされてきました。しかし、今次の調査で、外柵が失われた後も大規模に整地を行ったり、土坑を作ったりして城柵の機能を果たしていたことが明らかとなりました。

次年度は、今年度に引き続き南大路東側沖積地の機能を解明するため、外柵南門南東側を調査する予定です。



寺沢遺跡

にかほ市象潟町小砂川字寺沢



寺沢遺跡は、JR羽越本線こさがわ小砂川駅の南東1.5kmに位置し、鳥海山山麓西裾部の標高40～55mの北向き斜面上に立地しています（①）。遺跡の西0.4kmには平安時代の製塩に関する遺構や遺物が見つかったカウヤ遺跡があります。

寺沢遺跡の主な時期は、昨年度の調査で出土した須恵器の特徴から、8世紀末から9世紀初頭と推測されています。昨年度の調査では、平安時代の焼土遺構、土坑、河川跡などが検出されました。また、縄文時代の陥し穴状遺構も見つかっています。遺物は、縄文土器、石器、土師器、須恵器が出土しています。土師器片の多くは、いわゆる製塩土器の可能性ががあります。鉄滓も見つかり、平安時代の塩や鉄の生産に関連する遺跡であることが分かりました。

今年度は、昨年度調査区の東側平坦地から南側斜面地を調査しました（②）。

調査の結果、縄文時代の土坑2基、平安時代の焼土遺構1基、土坑6基、柱穴様ピット10基が検出されました。調査区ほぼ全域で後世の畑作による攪



らん  
乱を受け、遺物包含層はほとんど残っていませんでした。

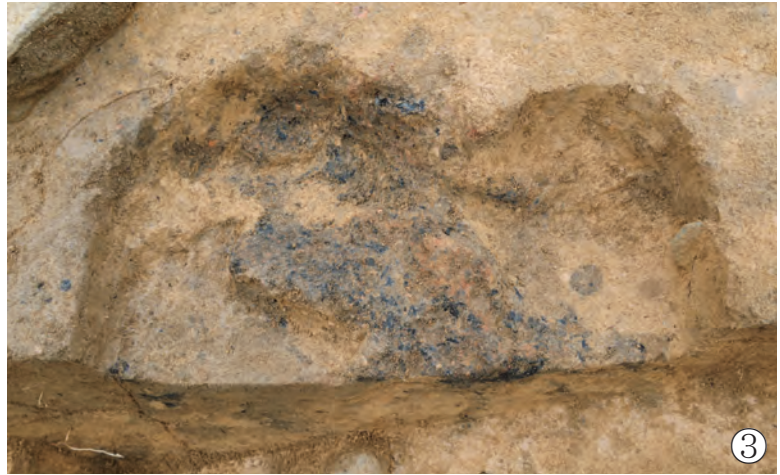
昨年度調査区に近い北側では、炭化物を含む焼土遺構が検出されました(③)。周辺の出土遺物から、平安時代の製塩か製鉄に関する遺構と考えています。

調査区南側の斜面地は、厚い砂層が堆積しており、畑作の攪乱の影響が地山面まで及んでいませんでした。ここからは、縄文時代の土坑が2基検出されました。

また、調査区北西側では時期不明の大型土坑が見つかっています。出土遺物は製塩土器と思われる土師器小片と須恵器、縄文土器、石器が出土しています。縄文土器は、畑作による攪乱土中からの出土で、縄文時代前期前半の大木1式土器(④左)、大木2式土器(④右)、中期後半の大木9式土器があります。大木1式は北東2kmにある上熊ノ沢遺跡で出土していますが、秋田県内での出土例が少なく、貴重な資料です。昨年度の調査では、陥し穴状遺構が検出されており、縄文時代には狩猟場として利用されていたと推測されます。

本遺跡で出土した平安時代の遺物は、カウヤ遺跡のものと類似しており、製塩土器は外面(⑤左)に粘土紐の積み上げ痕を残し、内面(⑤右)全体と口縁部を刷毛目調整するのが特徴です。

2か年の調査で、寺沢遺跡は、縄文時代では狩猟場、古代では製塩や製鉄を行っていた生産地として利用されていたことが分かりました。今後、遺跡の性格や特徴を周辺遺跡との関連性も検討した上で明らかにしていきたいと思います。



## したむらいせき 下村遺跡

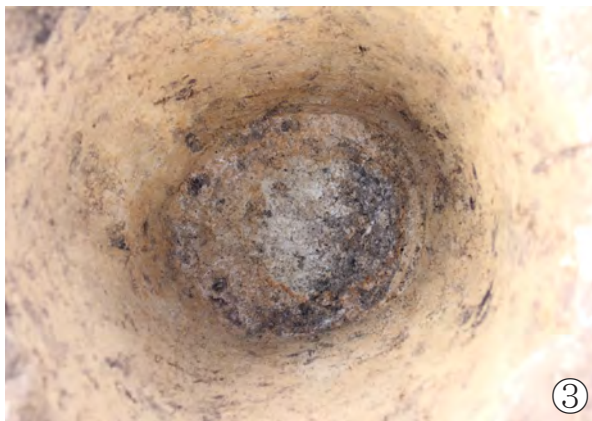
## ひらかまちしもよしだあざしたむら 横手市平鹿町下吉田字下村

下村遺跡は、JR横手駅から西に6.2km、横手市役所平鹿地域局から北に4.5kmの秋田県道117号（野崎十文字線）沿いに立地します。遺跡は現在の七日市集落の範囲と一部重なっており、周辺に広がる水田面からは一段高く、比高差が約1mあります。遺跡の西には皆瀬川から取水するM-2基幹排水路が、東には大戸川支流の弥十郎堰などが北流しており、このような中小河川の氾濫や浸食が繰り返され、現在の地形が形成されたと考えられます（①）。また、遺跡の北に隣接する七日市城跡は、中世城館として知られています。築城年代は定かではありませんが、慶長7（1602）年に佐竹氏が秋田へ入部した際、佐竹氏家臣の茂木監物が入城したと記録されています。城跡は現在境内地になっており、白髭稻荷神社が鎮座していますが、敷地内には城館として機能していた段階の土塁がいまでも残っています。

横手市教育委員会では、今年度実施された県営ほ場整備事業に伴い、遺跡総面積約5,000㎡のうち2,560㎡の発掘調査を実施しました。今回の調査の結果、掘立柱建物跡6棟以上、土坑8基、井戸跡1基、土坑墓1基、溝跡5条などの遺構が確認されたほか、平安時代の土師器、須恵器、中世の陶器、漆器碗などが出土し、遺跡が古代、中世、近世の複合遺跡であることが明らかとなりました。

今回の調査では、中世の集落域が確認されました（②）。集落域は、水田面から一段高くなった一帯で確認され、掘立柱建物が立ち並ぶ景観であったと推定されます。掘立柱建物跡の柱穴は非常に深く、底面には荷重がかかった痕跡（あたり）がはっきりと残っていました（③）。柱の掘方が深いことから、これらの掘立柱建物跡が造られた時代は現在と地表面の高さがさほど変わらない時期、つまり中世から近世頃のものと考えられます。この一帯からは遺物がほとんど出土しませんでした、





調査区内からは、戦国時代（16世紀）の瀬戸美濃大窯陶器片（折縁皿）が出土しており、七日市城せとみのおおがまとうに関する集落域がこの範囲にも広がっていたのでしょ

う。掘立柱建物跡が展開する範囲の西側には、土坑墓が検出されました。土坑墓は長軸約1.8m、短軸約0.5mの細長い方形で真北を向き、前述の掘立柱建物跡と同時期中世のものと推測されます（④）。墓域は、集落の縁辺に設けられることが多いことから、集落域の中心は前述の七日市城周辺に展開していると考えられ、今回発掘調査を実施した範囲は中世の集落域の縁辺部にあたると思われます。

調査区縁辺部からは溝を検出し、河川によって形成された湿地堆積層につながっています。この溝と湿地堆積層からは、古墳時代、平安時代の土器片が大量に出土しており、溝や湿地を捨て場として利用していたと考えられます。溝からは、バラ科のスモモ種実が30点ほど出土しています（⑤）。このような事例は近隣の平安時代の集落遺跡でも確認されており、古代の集落縁辺部の水辺で祭祀行為が行われた可能性があります。

（横手市教育委員会）

なが おか もり だて あと  
長岡森館跡かね ざわ あざ にし なが おか もり  
仙北郡美郷町金沢字西長岡森

長岡森館跡（①）は、横手市との境に位置する美郷町金沢地区の長岡森丘陵地の南西部、中ノ目川の北岸に位置する遺跡で、面積は19,085㎡、標高は91.6m、現況は山林となっています。

美郷町では平成25（2013）年から横手市と連携し、後三年合戦<sup>ごさんねんかっせん</sup>を核とした観光交流や歴史検証を行う事業を実施しています。この事業で実施している試掘調査については、後三年合戦関連遺跡の調査とともに、近年相次ぐ山林の間伐をはじめとする開発行為対応も兼ねて実施しています。

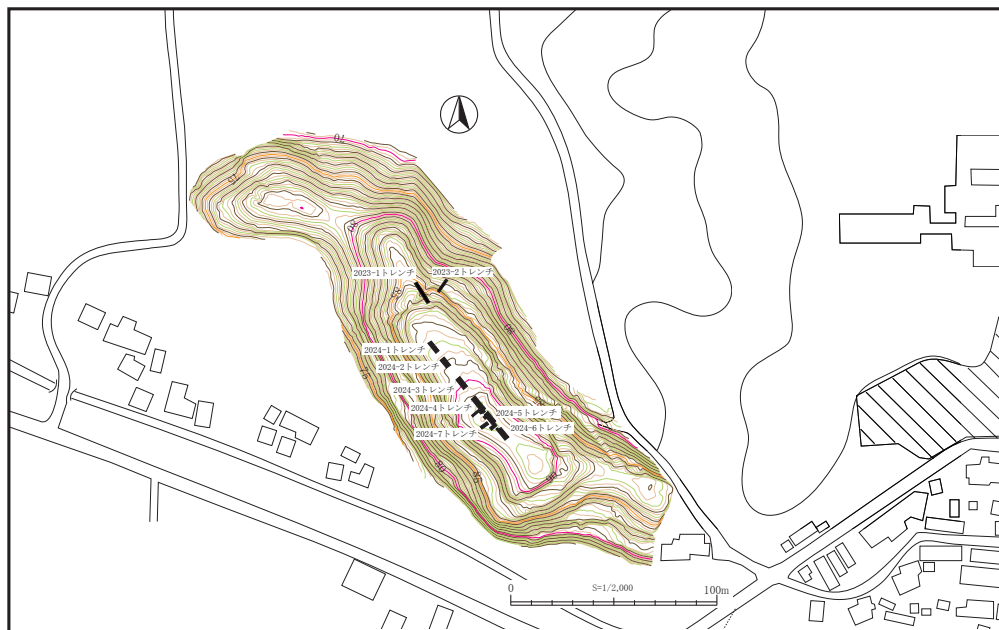


長岡森館跡もこの一環で、平成27（2015）年に美郷町金沢地区の独立丘陵を踏査したところ、発見されました。遺跡内の一部を下刈りし、専門家に縄張図作成を依頼したところ、空堀・土橋<sup>からぼり どぼし</sup>の跡が残る単郭周壕型<sup>たんかくしゅうごうがた</sup>の城館跡であることが判明しました。ただ、長岡森館跡がいつの時代の遺跡なのかは不明であり、町では後三年合戦に関連する城館跡の可能性も検討しつつ、試掘調査を開始しました。

初年度となる令和5年度調査ではトレンチを2か所（調査面積：24㎡）設定し、今後の資料となる基本土層および地山面を確認しました。2年目となる令和6年度調査では、昨年度の調査で得られた情報と、有識者の意見を基に、遺跡の平坦部で北西方向から南東方向へ向かってトレンチを7か所（調査面積：111㎡）設定し、埋土状況や遺構・遺物の有無を確認しました。

調査の結果、大部分は後世の改変で本来の埋土が削られており、3・4・5・6・7トレンチで溝状遺構<sup>みぞ</sup>と遺物を検出しました。

確認した溝状遺構の幅は約40～90cm、深さは約10～30cmを測ります。3トレンチでは最大90cm幅で北東－南西方向に延びており、掘り下げたところ礫が混じる浅い掘り込みでした。4トレンチ（②）では最大60cm幅の馬蹄形で、溝状遺構内や周辺から柱穴様ピットを検出しました。5トレンチ（③）では溝が周溝状に掘られており、にぎり拳大の礫が混じっていました。なお、5トレンチは、遺跡で

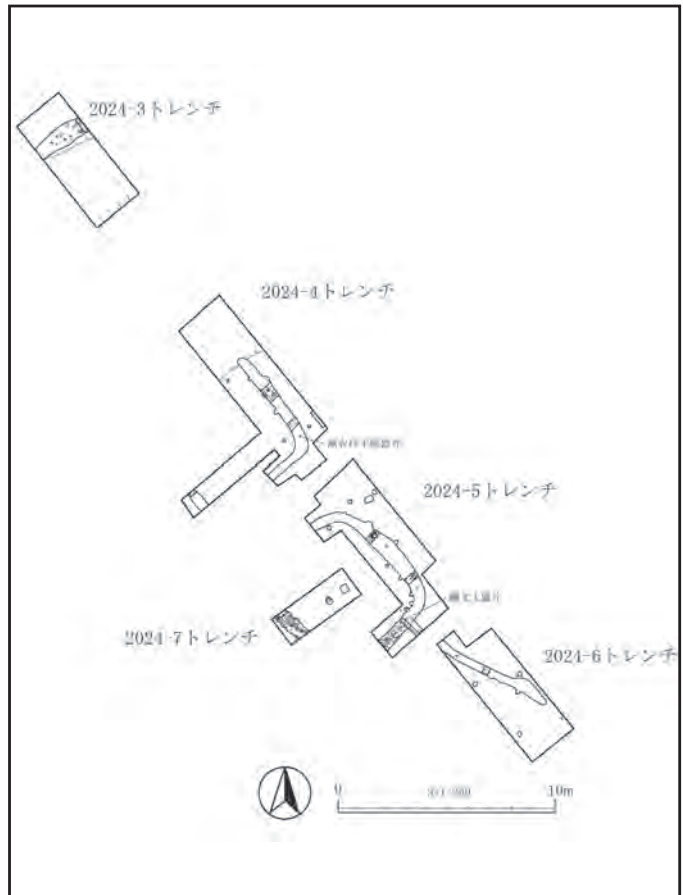


最も標高が高い場所に位置します。5トレンチの溝状遺構の追跡のため設定した7トレンチ(③)でも、同様の溝状遺構を確認し、にぎり拳大の礫が混じていました。この7トレンチでは、5トレンチに近い北東側で、柱穴様ピットを2基検出しました。6トレンチで確認した溝状遺構は5トレンチの溝状遺構と切り合っており、断面観察の結果、6トレンチがより古い時期の構築であることが分かりました。

遺物は8点出土しました。このうち、4トレンチの溝状遺構からは10世紀前半と思われる高台付土師器片(④)、5トレンチの溝状遺構からは縄文時代晩期の土器片が、それぞれ出土しました。高台付土師器片は内面が黒色化していました。なお、出土した位置の周辺から他の遺物は検出されませんでした。

今回の調査を踏まえて、検出された溝状遺構の構築時期は、土層観察および遺物の出土状況から、時期が異なるものではないかと考えています。なお、同様の溝状遺構の事例として、町内では平安時代の集落跡である湯殿屋敷遺跡(美郷町羽貫谷地地区)で検出されています。このため長岡森館跡は、城館として使われただけではなく、もう少し古い時代でも使われた遺跡である可能性が考えられます。今後は遺跡の年代観の解明に向けて、検出された溝状遺構の追跡、今年度調査地である平坦部から郭の縁にかけての様相を把握するため、試掘調査を継続したいと考えています。

(美郷町教育委員会)



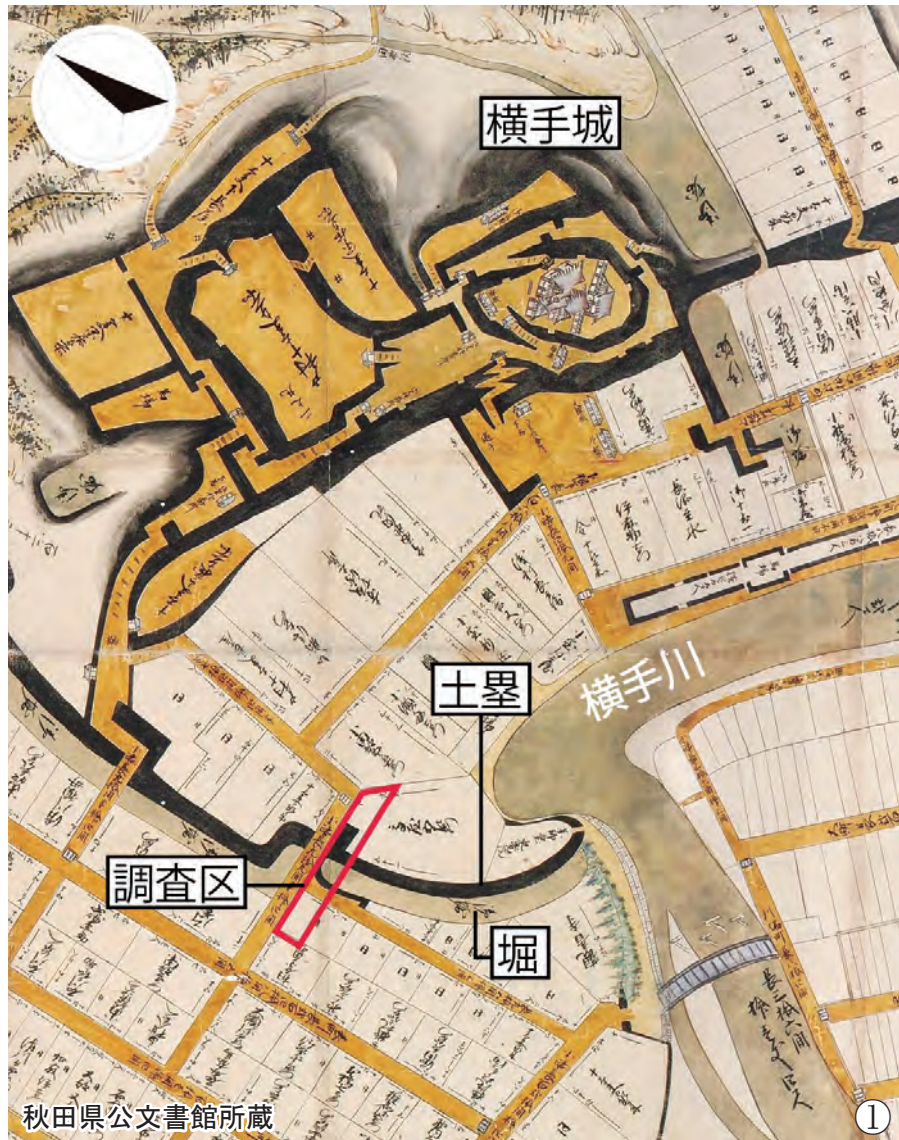
# 本町遺跡

## 横手市本町3番地、4番地

本町遺跡は、JR横手駅の北東1.2km、横手市役所の北0.7kmに位置し、雄物川支流の横手川右岸に立地します。北東300mには中近世の朝倉城跡（横手城跡）が位置しています。享保13（1728）年に作成された横手絵図には、横手城とその城下町が描かれています（①）。今回、道路拡幅に伴い、城下町の一部を発掘調査しました。横手絵図によると、調査区中央を堀と土塁が走り、その東側は横手武頭高屋氏の屋敷地、西側は横手城代戸村十太夫の家来の屋敷地と記されています（①）。

調査の結果、縄文・古代・中世・近世の複合遺跡であることが分かりました。

調査区中央部では、堀と土塁が検出されました（②）。堀は、最大幅が8.8m、深さが2.7mありました。堀の東西岸には土塁がめぐっています。土塁は、西岸が攪乱により残存していませんでしたが、東岸は基底幅がおよそ12.5mとなること



分かりました。

調査区東側では、近世のトイレ状遺構、中世の井戸跡・土坑、古代の堅穴建物跡・土坑などが検出されています。近世のトイレ状遺構は、直径約60cmの桶を利用したもので、底板の上からは<sup>ちゅうぎ</sup> 簀木（排泄の際、尻の汚れを掻き落とすための細長い木板）の可能性がある木製品、<sup>かんえい</sup> 寛永通宝、<sup>つうほう</sup> 種子が検出されています（③）。微細な種子や寄生虫卵が入っていないかを確認するため、本遺構の桶内の土を全量回収しました。今後、土中の微細遺物の分析を進めることで、当時の衛生環境や人々の食生活なども明らかにできる可能性があります。

中世の井戸跡は、確認面からの深さが2.1mありました（④）。底面付近では、水溜として利用された直径約50cmの曲物が出土しました。

調査区西側では、近世の堅穴状遺構・井戸跡・土坑、中世の堅穴建物跡・溝跡・カマド状遺構・土坑、古代の土坑等が検出されました。

近世の堅穴状遺構のうち、全体の形が分かる1基は、平面形が長辺4.3m、短辺2.7mの長方形を呈し、南側に出入り口を持ちます（⑤）。床面南西側からは焼土層を検出しました。その下から粘土層、さらにその下から焼土層を検出しました。つまり、同一地点で繰り返し火を用いたことが分かり、鍛冶炉として利用された可能性もあります。焼土層周辺の土は全量回収しており、今後分析を進めていく予定です。

中世の堅穴建物跡は2棟検出されています。うち1棟は北側に出入り口が付きます（⑥）。

縄文時代の遺構は確認されなかったものの、土器・石器が遺跡全体から見つかっています。

今回の調査で絵図だけでは分からない近世の生活の詳細や、さらに絵図が描かれた頃よりも古い時代の生活を知る手がかりを得ることができました。



## かみ みや の さわ い せき 上宮ノ沢遺跡

上宮ノ沢遺跡は、東を滝川<sup>たきがわ</sup>、西を小増川<sup>こますがわ</sup>に挟まれた標高35m前後の台地南斜面に立地します(①)。滝川に向かって南東側へ開析された支谷<sup>しこく</sup>にあり、台地の上部平坦面を超えた北側は、日本海へ下る斜面となっています。

国道101号線建設工事に伴って発掘調査を行いました。調査面積は720㎡で、遺跡の南縁を調査しました。遺跡の帰属時期は、約6,000年前の縄文時代前期、円筒下層a式期を主体とし、少量の円筒下層b式と中期の円筒上層式が含まれます。

検出した遺構は、<sup>たてあな</sup>竪穴建物跡2棟、<sup>しょうど</sup>焼土遺構2基、<sup>すば</sup>捨て場2か所です。遺物は土器と土器埋設遺構2基、<sup>ぎよろ</sup>漁撈に使う網の<sup>おもり</sup>錘と<sup>こっかく</sup>骨角器を研いだ<sup>といし</sup>砥石が目立ちます。

台地斜面の竪穴建物跡は、斜面を削り込んで床面を造るため、斜面下側が浸食を受けて徐々に床面が削り取られていきます(②)。

このように考えると、2基見つかった焼土遺構も竪穴建物跡の地床炉の可能性がありますが。2棟の竪穴建物跡と焼土遺構は、おおよそ4～6mの間隔で並んでいます。また、これらはいずれも地山土で埋められており、捨て場の堆積土(③)が黒色土であるのとは対照的です。2棟の埋土が同じであることは、ほぼ同時に使われていたことを示すもので、集落が開かれて裸地となった地面が掘り込まれ、土があまり黒くならないうちに同時に廃絶して埋め戻されたと考えられます。

その後、台地上の平坦面(調査区外)に新たに集落を開き、不要になった土器や石器を調査区の中央を通る谷へ捨てたのではないのでしょうか。捨て場が形成された頃は、集落周辺の植生が復活しており、黒土と一緒に遺物が堆積しました。捨て場には、薄く地山由来の黄色土が堆積した面がありました。このような地層は、台地上で縄文人たちが大きく土を動かし、裸地を造ったことを示しています。裸地造成とはまさに住宅や広場を造ったことに他なりません。

また、1度斜面に火をかけたようで、薄い焼土面も形成されていました。出土した遺物に<sup>さいし</sup>祭祀遺物はなく、同一母岩の剥片と石核がまとまって出土したことから、火入れは祭祀行為と言うよりは石器の素材となる剥片生産に関わる作業でしょう。

これからの整理作業では、遺跡の生業活動を具体的に復原していきます。

## お が なか やま まち あざ かみ みや の さわ 男鹿市男鹿中山町字上宮ノ沢



## 虫内 I 遺跡

## 横手市山内土渕字虫内

虫内 I 遺跡は、JR北上線<sup>あいのの</sup>相野々駅の西0.7kmに位置し、横手川西岸の標高105m前後の低位段丘上に立地します (①)。

周辺には、岩瀬遺跡、虫内 II・III 遺跡、小田 IV・V 遺跡等の縄文時代草創期～晩期にかけての遺跡が密集しており、集落、墓域等が営まれていたことが分かっています。

本遺跡は、平成3～5年度に調査が行われ、縄文時代後期後葉～晩期前葉の多数の土坑墓<sup>どこうぼ</sup>や土器棺墓<sup>どきかんぼ</sup>が検出され、大規模な墓域が確認され、注目されました。今年度は、過去の調査区の北側を調査しました。

調査の結果、縄文時代の土坑10基、土器埋設炉<sup>まいせつろ</sup>1基、柱穴様ピット<sup>ちゅうけつよう</sup>62基が検出されました。

断面が袋状を呈する土坑は、長軸1.16m、短軸0.59mの楕円形で、深さは1.20mです (②)。中からは、石皿<sup>いしざら</sup>や扁平な礫<sup>れき</sup>が中央付近にまとまって出土しており、穴を埋め戻す際に一緒に埋められたと考えられます。これらの石皿や礫は、被熱したり、人為的に打ち割られたりしていました。こうした特徴をもつ土坑は、これまでの類例から墓の可能性が高いと考えています。このほかにも土坑墓が検出されており、過去の調査区のさらに北側に墓域が広がることが判明しました。

調査区南西側では、長軸0.38m、短軸0.24mの土器埋設炉を検出しました (③)。現代の耕作によってほとんどが削平されていましたが、土器周辺の土は火を受けて焼けていました。この場所で煮炊きが行われていたと考えられ、<sup>たてあなたてもものあと</sup>竪穴建物跡の炉の可能性がります。

今後、過去の調査を含めた遺構の時期や分布を整理し、虫内 I 遺跡における墓域の成り立ちとその変遷について復元していきたいと思ひます。



# 井岡遺跡—第6次発掘調査—

由利本荘市西目町西目字井岡

由理柵・駅家研究会は、『続日本紀』宝亀11(780)年8月23日条に記載のある「由理柵」と、古代の駅家を記録した『延喜式』に記載されている「由理駅」を対象に、研究と当該遺跡の探索を目的とした研究会です。

井岡遺跡は、西目小学校の東側正面水田(旧西目潟)東岸の西目町井岡に位置しています。低丘陵上に広がる井岡集落のほぼ全域が遺跡として登録されています。

井岡遺跡は、平成25年第1次調査～同27年第5次調査まで5か所を当研究会が発掘調査をしました。第1次調査では古代の竪穴住居跡1軒と深さ約1mの大溝を発見していますが、この調査では平

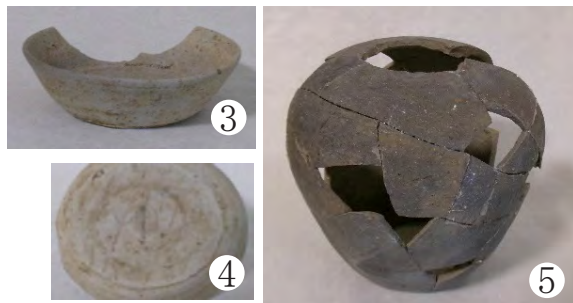


面規模の確認にとどめ、遺構の内部を掘り下げずに発掘調査を終了していました。しかしその後、旧本荘市内の横山地区や西谷地、上谷地地区、満願寺地区の調査を実施してきましたが、由理柵や駅家の可能性を思わせる遺構・遺物が発見できませんでした。そこで、古代城柵官衙遺跡特有の墨書土器が最も多く出土している井岡遺跡周辺を再調査することにしました。第6次調査は、その足がかりとして井岡遺跡第1次調査で発見していた竪穴住居跡を再調査し、その出土遺物を今後の判断材料にするため実施しました。

発掘調査の結果、竪穴住居跡は長径約3.3m、短径約3mの東南隅が少し膨らむ隅丸方形を呈し、住居跡の南東壁に石材を主構築材料としたカマドが設置されています。カマドは、一部遺存している石等から、両袖に石材を使用したものと考えられますが、住居廃棄時に破壊したカマドの被

熱で赤褐色に変色した拳大から人頭大の川原石が土器と共に住居跡埋土(①)から出土しています。竪穴住居跡の床には柱の穴は確認できませんでした(②)。竪穴住居跡の他には、第1次発掘調査で発見していた南北に延びる大溝跡が深さ約1.2m、幅約4mであることが判明した他、埋土からの出土遺物も小片ではあるもののすべて土師器と須恵器であることから、古代の所産である可能性が考えられます。

遺物のほとんどは竪穴住居跡の埋土から出土しました。土器は赤褐色土器(土師器)と須恵器で、そのうち須恵器が大部分を占めています。器種は坏類(③)が最も多く中には外面底部や体部に文字を書いた墨書土器(④)が4～5点出土しています。他に須恵器台付坏、須恵器蓋の裏側に硯に使用した転用硯、頸部が破損した長頸瓶(⑤)、土師器の長胴甕、口径が約30cm、復元高が50cmを超える大型の甕形土器等も出土しています。



(由理柵・駅家研究会)

## 岩ノ下遺跡

## 由利本荘市鳥海町百宅字岩ノ下

岩ノ下遺跡は、由利本荘市鳥海総合支所直根出張所の南3kmに位置し、標高396～398mの子吉川支流百宅川右岸の低地に立地しています(①)。鳥海ダム建設事業に伴って発見され、遺跡の南440mには中世城館の根井中後山館跡が、西1.8kmには近世の墓域である清水沢遺跡が位置しています。

調査の結果、中世の遺物散布地と近世以降の集落跡であることが分かりました。

中世では、珠洲産陶器や瀬戸美濃産陶器、中国龍泉窯系青磁が遺構外より見つかりました。

近世以降の遺構は、柱穴様ピット12基と溝跡7条、性格不明遺構1基です。そのうちの1基のピットからは事前調査を



含めて銭貨15枚が出土しました(②)。文字の確認できる銭貨はいずれも北宋銭で、祭祀に伴うものと推定されます。

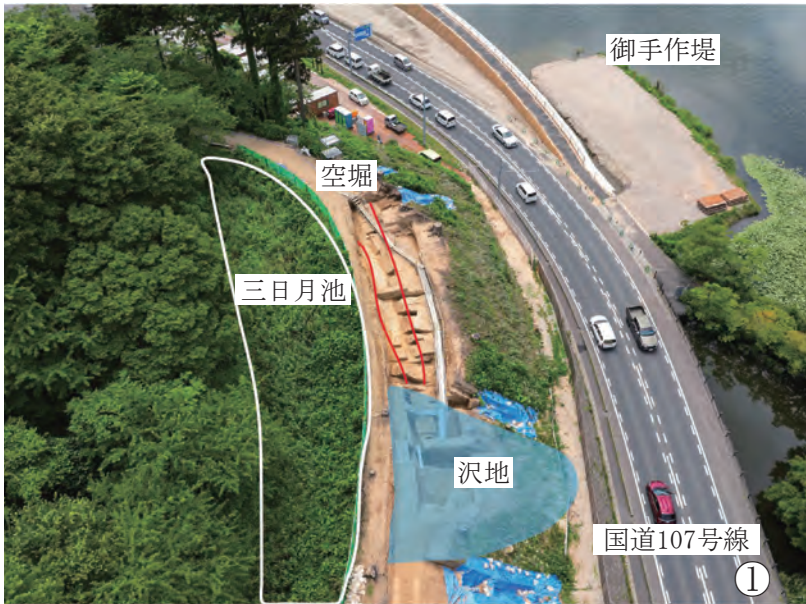
調査区東側では、幅4～6m、長さ20.1mの南北方向に伸びる溝跡を確認しました。溝跡からは肥前産を中心とした近世陶磁器のほか、木簡・下駄などの木製品や礫石経が確認されました。木簡は板材の片面に「赤(亦)カ与■呂カ」と記されてました(③)。礫石経は、経典の文字が記された基石のような礫で、両面に複数の文字が記されており、当地における宗教観を示す資料です。

今後は、周辺の城館や清水沢遺跡との関連を旧百宅地区の民俗資料や文献資料を参考にしながら調査していきます。



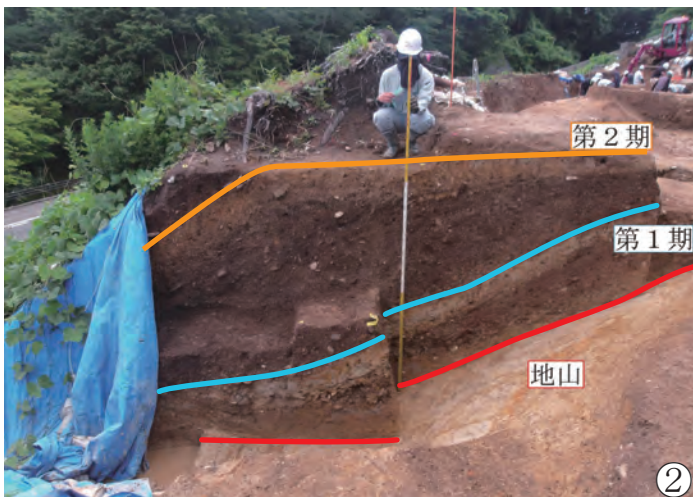
ほんじょうじょうあと  
本荘城跡

おざき  
由利本荘市尾崎



本荘城跡は、現在の本荘公園、由利本荘市役所の南に隣接した標高30m、子吉丘陵先端にある独立丘陵、通称尾崎山を中心とした範囲にあります。台地上に本丸と二の丸(①)、市役所を含めた北側の平坦地に三の丸を置き、その城下町は北の子吉川に向かって広がります。

本荘城は中世から存在し、関ヶ原の戦い後に、最上氏家臣本城氏が近世城郭として改修し、最上氏改易により元和8(1622)年に廃城となり、翌年六郷氏が入部・再改修し、明治時代に至るまで続きます。



平成13～19年に由利本荘市が、本丸及び三の丸の一部を調査し、本丸では弓櫓跡や板塀の他、中世の建物跡や井戸跡等を、三の丸ではゴミ穴を検出しています。

今年度は、国道107号に隣接する二の丸を中心とした150㎡を調査しました。調査区は平坦地である郭、それに付随する急斜面である切岸に分かれます。出土遺物

やこれまでの一連の本荘城跡の調査結果から、郭は中世後期と近世の2時期あることが分かりました。郭の造成にあたっては、地山面まで掘り下げた後、盛土をして地盤を安定させています。また、郭の中心付近は沢地を埋め立てていたことが分かりました。盛土の厚さは中世後期で0.90m、近世で1.50mあり、近世になって郭面を西へ3m近く拡大させていました(②)。昨年度確認された空堀は、中世後期に造成され、上幅2.80m、下幅1.08m、深さ1.21m、全長23m以上で、底面は南東端から北西へ向かって緩やかに上がり、途中から高度を再び下げ、北西端の沢地へ繋げ、一連の防御機能を果たしていたと思われます。近世には、具体的な遺構は確認されていません。貞享4(1687)年の様子を描いた絵図では板塀が郭の縁を巡っていますが、調査の結果、その痕跡は確認されていません。公園化に伴い削られたか、礎石などが撤去された可能性があります。

また、遺物は、盛土中から出土していますが、近世期の活動を示す遺物はわずかしきありません。これは、番役などの在番施設がないことによるためと思われます。

過去2年間の調査で、本荘城の築城技術の一端が明らかになりました。今後、他の城館と比較することで、地域や時代による築城技術の特徴や違いが明らかになると考えられます。

# 年 表

年 代	時 代	県内の主な遺跡	秋田県の歴史	日本の歴史	
約35,000年前	旧石器時代	縄手下遺跡（能代市） 才ノ神遺跡（由利本荘市） 家の下遺跡（三種町） 風無台Ⅰ遺跡（秋田市） 米ヶ森遺跡（大仙市）	秋田県に人が住みつき、ナイフ形石器や台形石器を使う。	日本列島に人が住みつき、石器を使った狩猟生活を行う。	
約13,000年前 約 9,000年前	縄 文 時 代	草創期 岩瀬遺跡（横手市）	大型の堅穴建物がつくられる。 地方色豊かな円筒土器、大木式土器がつくられる。	土器づくりや弓矢の使用が始まる。 移動生活から定住するようになる。	
約 7,000年前		早期 根下戸道下遺跡（大館市） ◎岩井堂洞窟（湯沢市） 菖蒲崎貝塚（由利本荘市）			
約 5,000年前		前期 道女木遺跡（秋田市） 上宮ノ沢遺跡（男鹿市） 上ノ山Ⅱ遺跡（大仙市） ◎杉沢台遺跡（能代市）			
約 4,000年前		中期 ○萱刈沢貝塚（三種町） ○一丈木遺跡（美郷町） 天戸森遺跡（鹿角市） 葉萁ノ木遺跡（能代市）			北陸で火焰土器がつくられる。 拠点集落、環状集落が発達する。
約 3,000年前		後期 ●大湯環状列石（鹿角市） ◎伊勢堂岱遺跡（北秋田市） 漆下遺跡（北秋田市）			大規模な共同墓地がつくられる。 北海道・北東北の各地で環状列石がつくられる。 関東で環状の貝塚がつくられる。
約 2,300年前		晩期 虫内Ⅰ遺跡（横手市） 白坂遺跡（北秋田市） 戸平川遺跡（秋田市） ○矢石館遺跡（大館市） ○柏子所貝塚（能代市） ○湯出野遺跡（由利本荘市） 鏡田遺跡（湯沢市） 上野乙遺跡（美郷町）			亀ヶ岡文化が栄える。 遮光器土偶が増加する。 九州で水田稲作が始まる。
約 2,300年前	弥生時代	◎地蔵田遺跡（秋田市） 横長根△遺跡（男鹿市）	狩猟・採集を中心とする生活に稲作が加わる。	邪馬台国の卑弥呼が中国に使いを送る。	
約 1,700年前	古墳時代	寒川Ⅱ遺跡（能代市） 蟹沢遺跡（横手市） 田久保下遺跡（横手市） 下藤根遺跡（横手市）	北海道と同じ土器や墓がつくられる。	前方後円墳がつくられる。	
	飛鳥時代			律令政治が始まる。	
西暦710年	古 代	奈良時代 ◎秋田城跡（秋田市） 造山十足馬場遺跡（横手市） 竹原竊跡（横手市） 井岡遺跡（由利本荘市） ○岩野山古墳群（五城目町）	出羽国が置かれる。 出羽柵が秋田村高清水岡に遷る。 雄勝城、由理柵がつくられる。	平城京に都を遷す。 和同開珎がつくられる。 東大寺の大仏が建立される。	
794年		平安時代 寺沢遺跡（にかほ市） ◎弘田柵跡（大仙市・美郷町） ○横山遺跡（由利本荘市） 胡桃館遺跡（北秋田市） 金沢城跡（横手市） ◎大鳥井山遺跡（横手市） ○矢立庵寺跡（大館市） 長岡森館跡（美郷町）	元慶の乱が起こる。 十和田火山が噴火する。 （十和田 a 火山灰層）  清原氏が栄える。 前九年・後三年合戦が起こる。	平安京に都を遷す。 坂上田村麻呂が征夷大将軍となる。  平将門の乱が起こる。 源氏物語・枕草子が書かれる。  平泉に藤原氏が栄える。	
1185年	中 世	鎌倉時代 ○大畑古窯跡（大仙市） 観音寺廃寺跡（横手市） 堂の下遺跡（三種町）	鎌倉御家人が秋田に入る。	源頼朝が鎌倉幕府を開く。 承久の乱が起こる。 元寇が起こる。	
1338年		室町時代 後城遺跡（秋田市） 竜毛沢館跡（能代市） ◎檜山安東氏城館跡（能代市） 下村遺跡（横手市）	秋田湊が栄える。	足利尊氏が室町幕府を開く。 応仁の乱が起こる。	
1573年	安土桃山時代	○山根館跡（にかほ市） ○戸沢氏城館跡（仙北市） ○本堂城跡（美郷町） ○豊島館跡（秋田市） ◎脇本城跡（男鹿市）	安東氏、小野寺氏、浅利氏、戸沢氏、六郷氏などが各地で戦う。	織田信長が安土城を築く。  豊臣秀吉が天下を統一する。 関ヶ原の戦いが起こる。	
1603年	近 世	江戸時代 久保田城跡（秋田市） 本荘城跡（由利本荘市） △旧秋田藩主佐竹氏別邸（如斯亭）庭園（秋田市） 本町遺跡（横手市） 岩ノ下遺跡（由利本荘市） ○白岩焼窯跡（仙北市）	佐竹義宣が秋田に転封される。	徳川家康が江戸幕府を開く。	

太字は報告遺跡    ●国指定特別史跡    ◎国指定史跡    △国指定名勝    ○県指定史跡



令和6年度 秋田県埋蔵文化財発掘調査報告会資料

発行 令和7年3月8日

編集・発行 秋田県埋蔵文化財センター

〒014-0802 秋田県大仙市払田字牛嶋20番地

電話 0187-69-3331

FAX 0187-69-3330

<https://common3.pref.akita.lg.jp/maibun/>



シンボルマークは、北秋田市白坂（しろざか）遺跡出土の「岩偶」です。  
縄文時代晩期初頭、1992年8月発見、高さ7cm、凝灰岩。